

## 花供養

底本 櫻井本  
校異 長野関口本

(題簽 表紙)

(表紙見返し)

叙

あとしめて見ぬ世の春をしのぶかなと、西上人のかしこきあとをとどめて  
すみたまふける頓阿師が、祭華園のふるきほとりなつかしとて、翁の十三  
回にあたり給へる年の弥生、追福の誹諧興行せられしは、東花居士がいさ  
ほしにて、今九十余年になり侍れど、東山万句の名はかぐはし。先の庵主  
闌更うし、中頃其跡を興し給へりしより、今の蒼虬うしにいたりて

(序一才)

年毎の供養怠ることなきものから、堂前の桜は、とし／＼に枝さへ、根さへひろごりて、其香や影や四方つ国に満／＼て、道に遊べるも遊ばざるもなべて此法筵にのぼらんことをおもへり。されば此さくらの行すゑ、翁の余光なほも添ひつゝいやしげりにしげれば、今よりは我道の扶桑木ともいはましやと、ことのさかゆくよろこぼしさを可董はじめにしるす。

(序一ウ)

花の咲山もと見えて海の音

長閑さあまる雲の一降

春もはや親子雀の鶯ふりて

石屋根まじる家のかたかり

ありたけの銀鎔にふきながす

萩よりいそぐ人のゆふ暮

竹束を月の径にうち倒し

めでたき事もさま／＼の秋

百池

蒼虬

鹿古

芦涯

瓜坊

斗入

玉洋

稻丸

ウ

老の名のつくより朝の起能て

糞とり船に藻屑かき込み

涼しさを鳴ぬ鳥なき志賀の松

籬の上に乾く白布

さゝめごとつもりて声のうちかすり

文書なぐるたもと重たき

むかしより人の心はいさしらず

しろりと明し雪の遠山

泰澄がかたみの仏世に光り

桃醉

玉屑

羅城

とほる

北莖

百磨

後楽

其成

駟丹

何とかいふて伐ぬ榎の木

行雲のうつれる月の潦

羽音さびしく田に帰る鳴

秋の末かたづけて置土車

雨降かゝる松の開き戸

火もたてず人の哀を語り合

老ては麦を好くばかり也

白梅に冬のなくなる風が吹

築(ママ)波ぞ寒き星の明くれ

破巾

馬蓼

柏翠

双南

宋和

其白

桂郎

馬印

芦蝶

恋すれば機のはしにも寝たりける

はつ時鳥夢か現か

むらさめは東へはるゝ淀の朝

細き煙の何所までも曳

いとをしとしるしの松を顧て

軒くれかゝる若葉つめたき

乙道

五芳

月峰

千阿

駝岳

雪雄

右一順末略

我ながら花物狂ひと成にけり

花のある里より春は暮にけり

加茂川のほとりにて

花の香も交りけにけりな水の味

花の山葉し道に暮にけり

散ば咲桜最中や東山

人声の桜にしらむ山路哉

山ざくら此比京は月夜なり

やす／＼と峠をこゆるさくら哉

長崎月庵

鞍風  
洵美

延之

素人

樗南

杜陵

其英

盤露

雨のさくらら今も葉がちにならんとす

奈良草履ふみならはせよ花の山

つく／＼とみれば若木ぞ遅桜

年／＼や花に心のあたらしき

人の気の桜にみちて散初る

山ざくら女の声の峰こえる

燭秉て夜ちるさくら惜みけり

守る人の名を呼深山ざくら哉

かくばかり日は惜からじ遅桜

、  
吾友

、  
志鴻

、  
祥禾

肥前島原  
、  
白花

、  
神代  
、  
呂柏

、  
利帆

、  
齋我

、  
魯央

、  
画鮮

花のあらしの中より起りけり

雪おしき日も暮てけり初桜

あな尊花にめでたる昏の月

明行や磯馴ざくらに浪遠し

網だく声の霞む臙気

旅硯春を馬上に匂はせて

鄙の酷酒さめやすき也

又ひとりおとなふ月のほはら□

、

、サガ

、島原

春喬

涛明

桃仙

朴介

画鮮

春喬

介

鮮

鶴飼そめて秋に富ぬる

亡鹿に古き刀を銚しみん

徒はてしなき野路の草原

紅の雲たちのぼるみさゝぎに

怨がごとき筈(コサ)のみだれ音

我恋よ岩ねしのぶの月寒き

十苻の菅菰みな氷る夜は

米五合鼠の食みと成にけり

内裡普請の役にさゝれて

喬 介 鮮 喬 介 鮮 喬 介 鮮

天神に百か年の幣奉り

しば／＼落る池の小嵐

花の雨はれて梢のくれ近き

罌粟のわか葉に蛙鳴出す

明行や嶺にわかるゝさくら雲

家土産のさくらに母をいさめばや

名のみしるさくらをけふの主哉

雲に入る心地こそすれ花の山

、  
諫早

喬 鮮 介 喬

、  
輝白

、  
梅路

、  
ぬい

、  
楚艾

江の花や風をうらみつ風□つ

花一夜千里を巡る心かな

花の本うき世しらずの寝たりけり

散花や盛過にしにもあらず

花の月朧あまりて光かな

花の陰人ひそやかにたゝひけり

あれ人は人も花なり都なり

花ざかりことに咲木のさかり也

銭もたで度々花見いたしけり

、

、

、

筑前ハカタ

、

、

、

、

、

雪香

孤石

文塘

卮詞

立翠

任風

月孤

鼠紅

吾来

おきるたび花の散居る月夜哉

花ちると仏造りに告ばやな

聞てさへうれしき花のさかり哉

手折行花につれなき嵐かな

散花を袖につゝめる名残哉

夕ざくら無常とつねに見なしけり

隨身の弓矢も花のあたり哉

花守や聲と見えておもしろき

今の人も斯すれ花に剪灯

、  
瓢風

、直方  
橘雨

、野浜  
櫓睡

、  
霞梅

、  
起悦

、飯塚  
可都美

、豊後日田  
葵亭

、  
松那

、長門赤間関  
万井

昼は花夜はさくらと風がふく

花咲て松青／＼となりけり

月のさくら散がてには、見ゆるなり

花の山行／＼足のかるさ哉

花守や頓て翁と呼るべし

ひるがへる乙女の袖や花の雲

山青花欲然

山笑ふとや花に酔ふ天津空

青空や花曇る日の猶遠し

、  
羅風

、  
万水

周防岐波  
春郷

安芸広島  
玉桐

、能美  
雨丹

日向美々津  
吟龍

安芸竹原

松蘿

、信良  
胡江

花はよしの庭の桜を見るに付

欲ありと仏もいはじ春の花

萌出る景色も有や花の山

灯ともすも中／＼侘し散桜

古寺や花の上なる昼の月

散花の花に風なき日成けり

花の奥水しん／＼と鳶の声

我さくらら忘れて居れば咲にけり

何心ありてさくららに礫せる

、本郷

、南方

、

、小方

備後福山

、

、古府

播磨

阿波

其乗

励掲

節雨

可友

李朝

芦郭

可卜

玉屑

羽角

見勞て我身の上にもちる桜

花に来る人むつまじく美しく

たゞひとり酔さめて花の雨夜哉

俵米の小口見えたり家ざくら

昼となく夜となく花の盛かな

下臥や風のきせたるはな衣

朔日の月なを花の名残哉

夕風のさくらの起る野末哉

詠しみて手折んと花に欲起る

淡路

陸奥仙台

、

、津軽

出羽秋田

上毛雲嶺

、草津

、

、大原

玉華

雄淵

乙調

里川

吾長

鷺白

麻苺

阿原

青蒲

あけぼのや桜におもふほととぎす

影おつる池のほとりの桜哉

とかくして世の人出たり遅桜

池水や吹こむはなに鶺鴒

はつぎくから人の心を咲にけり

花の山くだれば里は月夜哉

花の枝引よせ惜む念仏哉

時得たりうらゝかなけふちる桜

初花にいとへ五日の風とても

、

、小暮

信濃高遠

、松本

、

、

、坂木

、

、諏訪

麴舟

也蓼

白兔

可考

雨喘

求巳

朝左

有栲

稻花

花つゝく鳥は小悪し朝な／＼  
眠気さすまづ山越えて花見哉  
花鳥は花に倦るもありつらん  
鐘よりもあちらを花に明て行  
児ざくら花にせかるゝひがし山  
広前に手向草かな筆の花  
其ゆふべ花にわかるゝこゝろ哉  
よき事のつもり／＼て花の山  
葉桜となりて小寒し峰の雨

近江草津

、下釣

四老  
荷屋

、太田

二鶴

、

瑳雀

、普門邑

琴路

、佐川

末子

、途中

一溪

、古田

知石

、八幡

芳志



居眠れば桜の起すあるじ哉

花の色去て涼しき姿哉

咲花に散花にうつり心かな

双林寺の花にかり寝して

花の夢見て魘るゝ嵐かな

嵐絶てさくらは雲に隠れけり

昼中の桜につゝむあらし哉

山寺の庭からつゞくさくら哉

面白さかうといはれぬ花の山

、

、高島

、日野

若州谷田部

、

、

高浜

北前川

桃醉

右之

素艶

汀波

貫卮

歌国

帆路

寿卜

咲花に物いふて見るこゝろ哉

初花や田中の室の朝ぼらけ

花ざかり人の人見る野路山路

鳥啼やさくらちる日の山巡り

枝ながら花をつかんでとまり鳥

道しばし隔られぬるさくら哉

さま／＼の姿もありて花見山

さくらちるや流の末の誰が思ひ

咲し時蝶もたはれる桜かな

向笠

加賀高松

独楽僧

自明

都園

全

蘭路

横卷

和選

里川

北舟

咲花や香ほどゆゝしき春の色

花の比めぐるや酒の二日酔

大やうに花の一重や山ざくら

山朧雨の降出やはなの枝

西東花白雲の都かな

杖のあと目に立ほどの花ざかり

いさゝかの小とりもよしや花の川

新しき花にうつりて月久し

三日ほど散さたはなし夕ざくら

、

、

、

、

、

、

、金沢

、暮柳舎

、

把翠

芝洗

亀十

甫水

麦風

御風

一抄

車大

眠和

花曇り夜は明にけり松の音

川すぢや桜にあまる山かづら

片ざとも花や柳のたゝみにて

物思ふ朧の花のすがた哉

出ぬけても／＼花のよし野哉

春もはや高き所のさくら哉

人声も朧にはるのさかり哉

人すまぬ桜に遠きむかしかな

行／＼て里はながれに夕ざくら

、 、 、 、 、 、 、 、

槐路

免三

涼対

其箭

蘭吹

対山

路童

雪貢

幸丸

夕ぐれや見えて静けき船と花

さればこそなんにもみへね花の山

さくらよりさくらにうつる心哉

花の中人声くるゝ便り哉

砂川やさくら散日の魚早き

やゝもすれば驚かしけり花に鳥

猪の吹てあるきぬ散さくら

昼過や桜咲出ス竹のはし

遠山の桜さきけり雲一重

犁松

松斎

馬曹

霞松

蘭史

北台

桃化

梨鳥

其如

磯山やさくらにもどる夕日雲

、

樗陰

花ざかり何をうき世の食物ぞ

、

十廿

暮るゝときむづかしげなり山桜

槐庵

雪雄

ゆふぐれの花を分入るこだま哉

能登宇出津

碩茂

水も臙に岸の月影

竹姿

酒のなき関屋の春の打侘て

柏茂

鑄かけのぞけばむせぶ竹炭

茂

うら西の風は時雨と降かはり

姿

冬草あさる雁がねの泥

ひとつくね雲はあさひか山ざくら  
北くれて花の香ぬすむ嵐哉  
此まゝにありたき花のあるじ哉  
花の香やかりそめならぬ朝げしき  
魚影の浅瀬にはやし散さくら  
初花のけしき成けり海の色  
さくら見や此いたゞきを別世界

、曾良

柏

柏茂  
竹姿  
一得  
八湖  
魯洋  
碩茂  
岸芷

松の声ゆたかに山のさくら哉

人去て花一円のにほひ哉

永き日も猶永かれやはな心

花の雲人のいへれば見付たり

まゝならば抱ても見たき桜哉

山ざくら川たけ添ば道ちかし

磯山やさくらの中を帆のはしる

原中のさくらちいさく咲にけり

常ならぬ夜の静さや散桜

、黒島

、為本

、加由

、佐渡 一静

、越中 洗耳

、蘭阜

、富山 花葉

、位知朗

、維一

夜の花にうちかぶせたる松の声

ちる花となるや雀の夜の声

さくら／＼煙籠りて暮にけり

とても散花よ月夜を重ねかし

雨の花あまりてなどか袖に入

酒樽に桜をさしてもどり哉

山のはのみへぬさくらの盛哉

角落て鹿も花見る姿かな

花の雨なつかしの人来たりけり

、  
、  
、女  
、  
、  
、  
、  
、  
、

薄年

巨泉

霞立

子丑

暮丸

一洞

うめ

乙峰

吳山

ほつ／＼と花に音あるさくらら哉

山鳥の尾に散やせん夜の花

存分に分入る月のさくらら哉

夜も寝ぬか庵の桜に灯影さす

何を煮て煙らす花の扉哉

みよしのや花より明て花に暮

薄雲の左右にわかれて朝桜

仏法の山となりけり花の時

短冊の思ひ残してさくらら哉

、 、 、 、 、 、 、

丹房

吐龍

度来

如泉

柴川

撫泉

其声

如弦

万良

日の出て山静なる桜かな

花咲や門を過行君が声

折取ればさ桜淋しき木ぶり哉

馴まじと思ひし物を桜花

笠取て鳥驚かすさくら哉

余の事に似ぬや桜の折惜み

春の夜の月あたゝかや散桜

ちる花の物にさはらぬ風情哉

汲水の桶にこぼるゝ桜哉

、

其一

、

斗一

、

玉屑

、

国花

、小林

沙麦

、滑川

梁明

、

子蘭

、

君芸

、魚津

三壺

出心のあしたや花に里だより  
風もよし花のふゞきの夕日照り  
老ぬれど色もかはらぬ桜哉  
白雲につゞく尾上の桜かな  
椎櫂に双びて花の光哉  
分のぼる山はあかるし夕桜  
吹立や花の行ゑの大井川  
立山を見わたるうちや花寒し  
山のはの賤屋にふるき桜かな

、  
、  
、  
、女  
、  
、  
、  
、  
、

半哉  
松香  
巨扇  
栗朝  
百生  
のぶ  
春峰  
菁夫  
文景

花の陰ながらるゝ水の清さ哉

花守て人に酔たる天気哉

花の末入日ばかりの山路哉

しづかさの空に雪降桜かな

寒からず暑からずよき花の山

船さすもおなじ所の花見哉

朝戸出に見わたすさとの桜哉

松山を出ぬけて月のさくら哉

日最中や花の上なる鶴の声

、 、 、 、 、 、 、 、

知碩

英文

立嶺

史溟

世器

周再

馬亮

魯山

倩貞

夕暮に心とどめてはな見かな

吹かたは何れの風かちるさくら

花守の花を見あかぬ風情哉

散る花に扇を拾ふ小みち哉

ゆふぐれももとの色なるさくら哉

山ふかく人もなげなる桜かな

朧夜の花とまりけり堀の上

古葉の下の蛙鳴出す

、

、

、

、

、

、

越後梶屋敷

北原

雲蓋

東皐

芸肇

周台

太翼

路筌

之鴻

春の水あちらこちらと流来て

鑄がたつゞくる土をこねけり

名月の庭に蒔たる稗のから

ぬれて小猫の秋を寒がる

来る雁にうちあはてつる女房達

須磨やあかしも波はものうき

けふもまた石切ばたに日を立て

冬あたゝかに山ぶしの貝

藪ふかき家中の町の通り抜ケ

萩里

与竹

若水

卯来

蒼虬

佳青

古嵐

指翠

古林

朝市終る雨のはら／＼

卮万

見わたせば／＼山のさくら哉

越五智

岸暁

水音を入れてさくらの盛哉

、

巽明

ちる花によるや小魚の返り浪

、

五先

散花の吹だまりある小家哉

、

文晁

かぎりなき花や行かふ雲と山

、高田

とさを

眼覚れば桜風なく明にけり

、

季明

一年の日和なりけり山ざくら

、

竹良

夜に入ればどこからどこも花の山  
どの木からはなれて来たる散桜  
くるゝまで雉子は啼なり花盛  
仰向て花のもとまで来たりけり  
花咲てくれ／＼我はいやしけれ  
只ひとり居れば桜に寝とけたり  
山陰にふき残さるゝさくらかな  
長閑さはかくれて花のさかり哉  
散そめて日すがら花のうつり行

、 、 、 、 、  
行脚  
越荒井

春江  
左琴  
几丈  
鬼入  
空阿  
如蘭  
芦洲  
巴積  
旭浪

十錢や花の木陰のむしろ代  
木の下の人さま／＼の桜哉  
はつ花の道分得たるあした哉  
人霞うへを一木のさくら哉  
火を焚ば花の散来る山家哉  
松風に花はめで度日より哉  
花咲て露のさたなき庵かな  
花の友心／＼はなかりけり  
有明の月のほとりのさくら哉

、熊塚 時來  
、増田 泉古  
、 波入  
、今町 驪彭  
、 其徑  
、 其徑  
、 之斤  
、 柏崎 吳洋  
、 其貞  
、 平水

初花の朝日に堪て雫せり

鐘聞ぬ人に咎なし山ざくら

桜ちる中を負はるゝ子供哉

ひとしきり暮るゝ色有散桜

余念なく花に一日をまかせけり

先達はとなりの人よ花の山

見るほどの人よしゆかし花盛

八重ざくらさながら軽く吹ちりぬ

奈良坂や花の跡なる薄月夜

、

蘭甫

、

由己

、

玉宇

、

虎雄

、井ノ岡

清泉

、出雲崎

丈雲

、与板

都良

、

杜皋

、

陸二

花咲て七日は夢かまぼろしか

あすはまた見るべき桜おほき哉

一番は誰がふみ分てはなの山

たそがれや桜顔なるさくら人

まだら雪ふみつゝ行ば桜かな

風止て嬉しき空に散さくら

花にあらし道二筋は行がたし

山陰や花ちる時の墓の声

酒にもれてひとり静に桜かな

、 、 、 、 、 、 、 、

朧夢

桃止

交帰

扶草

市隠

石翠

雨青

知夕

雲沖

咲や花雨夜の月のもどかしき

花の雲終日吹てしづかなり

川添柳青みたつ門

畠うつ春は車に土つみて

はやゆふぐれの灯付来る

小男鹿の一声立る月影に

瀬のかけたる鮭拾ひけり

、

長岡

打羊

宇桂

蒼虬

、桂、

虬

花の日や願なき身の心栄

長岡

鳥茂

ゆかしさの庵や戸ざして花の中

越目来田

里竹

花の雲どちらへ行も同じ道

相州猿ヶ島

丈水

はなの山あしたを待ぬこゝろ哉

、

江水

藁苞の中にも花の初日哉

、

正二

花ざかり星をかぞへて戻りけり

、

浦夕

人ちかくなりけり花の山がらす

、

馬成

無理屈に主人と思へ若ざくら

、十歳

丈江

年経ぬる姿も若し花の山

藤沢

曾登

はつざくらしばし曇と見る日哉

相州

花紅

あらためて又来る人やゆふ桜

江戸

風化

殊更に桜ちる夜ぞ夢深し

、

紗言

人なみに猿も桜の木の間哉

武二合半

定雅

吹越てさくらしらする野寺哉

古学庵

祇徳

日の岡や明はなれ行花の雲

水戸

湖中

咲花に水色青きひる間哉

、

莫道

曙を見て空淋し家桜

遠原川

可月

明を啼鳥かはゆし花の中

、久喜賀浦

和吹

山ざくら山へもどらぬ鳥もなし

名古屋

竹有

散花にかづけて浮世遁れけり

、

岳輅

夜明れば月こそなけれ峰の花

、

羅城

よしのにて

名残ぞと散敷花に倚て見る

伊勢四日市

眠五

春の夜を押広げたる桜かな

、玉垣

孔阜

花にそふて松も闇夜のあかり哉

、神戸

東籬

はつ桜こゝにもはるの一木哉

、山田

四溪

里へ出る水の音あり山ざくら

伊賀上野

未臺

手をそゞぐ水に桜の一重哉

花の雲松は夜明の常の空

そよと吹風も白しや花の昼

けふもまた操返しけりいと桜

夕ざくら白き物とぞ成にけり

ゆふざくら人から先に散にける

去年汲しまゝの井戸なり花の山

さくら売人の多さよ花の山

花ざかり水に添来る朝の風

、

、

、

河内楠葉村

、生駒村

、

、

浪花

、

巢鶴

可慶

蛙方

一笑

耒耜

蓬宇

古光

若翁

自樂



朝風や花に偽なき世なり

散花の松は音なき夕かな

あれほどに海是ほどに花の山

花うりの七野通るやゆふ曇り

誰も来ぬ庭吹はらへいと桜

柴の戸のあるじは留守よ花の陰

歌を讀鳥も来よふか山ざくら

ひとり来て花にまる寝や水の音

誰が子ぞひとり昏けり花の中

、

富田林

八千里

里喬

撰小池村

駝岳

左延

、多田

遊山

、池田

遅春

、

鹿楓

、

士俊

、

稻丸

山と我中をちり行きくら哉

うつろふて日和と成ぬはなの山

花盛鳥の羽ぶきもあらし哉

雲散て山はさくらの夕かな

大方は花となりたるさくら哉

分入れば霞の中のさくら哉

夜ざくらの志賀はむかしに似たる哉

夕ぐれはさくらばかりと成にけり

花守や夜のあらしに起あがり

、  
丹波

瓜坊

如六

朝人

美瑞

得禾

蘿月

平亭

武陵

五柳

、  
但馬平野

置曲突や花かき出して酒の間

花ちりて寝安き夜のあらし哉

咲みちてゆふべや花のしぐるらん

飛て行鳥に花の曇り哉

酔ぬ日も酔ふ日も花のあるじ也

此家もまた留守の戸や花ざかり

さくら咲中をわかつや杉桧

宵月や花より出て花に入る

咲花の傍はづかし賤が家

、村岡

、丹谷

、

、網場

、

、

因州岩井

、

、

晴鳧

五雁

月鳥

清月

吐月

十手

蒲川

如竹

禹川

立尽す花も奥より人の出し  
浪の上くれても花の弥生哉  
夜に入れば寒い風吹さくら哉  
雨の花道一筋になりにつけり  
四方より桜散けり庵の闇  
黄鳥のねぐらか夜のはなに鳥  
へし折の桜花さくゆふべ哉  
しづかなり下の五日を散桜  
むら／＼と花に成たる夜明哉

姫路  
、  
播州  
明石  
城南  
大和  
洛

寸草  
后菊  
帆風  
東貞  
五牛  
可翠  
月峰  
古塘  
五芳

市中の寺に色よき桜哉

万代やさくららの下の土黒し

散ことの定なき日を花供養

咲みつる花の中あり叩鉦

散れかしと夜にそふ花の木陰哉

花の山下りる踏切れ草履哉

けふといふ桜になりし花見哉

静さのさくらに立るひともなし

花ざかり山の形まで思ふまゝ

土卵

馬印

其成

芦涯

鹿古

百磨

宋和

桂郎

馬蓼

花の陰むしろさげ行女かな

人も日も出ぬうちなる桜哉

山寺の人はよく寝るさくら哉

とし／＼の気色こそあれ山ざくら

花盗む人をあはれの娘かな

さら／＼と今朝を咲なる桜哉

朝ざくら散を惜まぬ心かな

露うけて猶浅からぬ桜かな

雲よりも雨をかゝえし桜哉

芦蝶

季柳

其白

乙道

在貫

旧草

依唯

夕可

双南

春もまたたのもしき花の荅哉

松風に唇寒しはなの顔

桜さく比とて啼か浦の鶴

咲花に野山の際もなかりけり

夕暮は我にさくらのむつまじき

とほる

駒丹

可董

泉立

蒼虬

許六がつくりし肖像をあふぎ、供養まうすとて、先懷紙にうつせし東山の花を始とし、むかしはながれとゞまるべくも去られぬ。海山の意成りより、明おくるころの花のかず／＼文台にみちたるをうつろはぬうちにと「二六才）ひとつにそろへて奉られしこそ、めでたきばせを堂の本意なれ。

享和元年春

延友国記

京御幸町錦小路上ル  
書林 勝田喜右衛門

(裏表紙見返し)

（裏表紙）